

アカシヤ、サイカチ、ヤシマブシ、ハンノキ類等が適等であるが、立地の關係上、直ちに造林不可能の場合には、植生連続上オー次の草類とか、ハギ、コマツナギ、イタチハギ等豆科の雑木性植物を繁茂させ、立地條件の緩和につれて徐々に高次植生の樹種に転換すべきである。又混牧林の一部を構成する防風林、溪畔林、隔離林、水源林、風致林等の特殊牧野樹林に対しては、なるべく密林を仕立て、耐蔭性の強い常緑カシヤ、ツバキ、マテバシイ、ヤマモモ、タブ、イスノキ、シイ等を採用して、全体として健全な混牧択伐焼林を造成すると共に、その択伐により薪炭材を生産し、更に必要に応じては一部の良形質木を保残して、牧柵その他の用材に充てること得策である。

## 九州に於ける国有林野の分布と

### 管理機関としての局の位置について

宮崎大学農学部 二 宮 金 次 郎

九州全国有林野52万町歩の分布率を各県別に観るに、宮崎34.2%、鹿児島31%、熊本に12.9%（宮崎、鹿児島に隣接面多し）計78%が南九州に偏在し、福岡、佐賀、長崎、大分の4県を合計すると虽も僅少22.9%に過ぎず。而して之が事業実行機関である管林署は、宮崎14、鹿児島11、熊本7署を集計すれば、熊本管林局管下45署中32署の多きを南九州にて占め、福岡2、佐賀2、長崎3、大分6と集計するも13署に過ぎず、即ち宮崎1県にも及ばず、国有林野が南に偏在するため管林署は九州南部に偏集して設置せられている。然るに国有林野管理並に経営の監督地方機関たる管林局は、九州を二分して管理していた鹿児島、熊本両大林区署を大正13に全国を6管林局とした時、九州に於ては熊本管林局として熊本に創設を觀、今日に到れるものであります。当時の交通事情止むを得ざる便宜の処置とはいふ九州国有林の分布と管林署の配置が前述の如くなれば、之が指導監督機関たる管林局が当面せる林力の減退、荒廢地の復旧、緊急造林、開拓地の開放に特別会計制度の完全なる運営等、国有林野事業の前途多難なる秋、交通機関も大いに發達せる今日、新しい国有林の在り方のひとつとして、事業実行機関である管林署を指導監督し一層実効を挙げるには、有機的機構の運営が能率的に為されねばならぬ。この為には国有林野並に管林署の集中している南九州に局の位置を移転すべきではなからうか、今や宮崎県は前述の如く、国有林野並に管林署を熊本、福岡、佐賀、長崎、大分の5県の合計に匹敵、しかも県南に鈿肥杉の優良林業地あり

、その蓄積豊かにして、近代木材化学工業会社たる日本パルプ工場あり、駒の名産地たる油津港は又木材輸出港として名声を挙げ、県北は木炭、椎茸の生産の量と質に名をなし、新興工業会社旭化成工場は益々その規模を大にし、更に国際的なタウ会社の設立を觀、次で細島港に県下唯一の貿易港として木材の輸出に預り、隣接して工業港として一万吨級の入港できるべく竹島港の建設に近く着工する運びとなり、總工費10億円で東九州一を跨るべく期待されている、国有林に源を登する県下各河川は電源県として、九州水力電気需要額の52%を現に賄ひ、新規に工費85億円、日本一の上椎葉発電所の外、県管の液川発電所工費20億円の2工事、既に着工中、更に綾南、綾北両川に工費75億円にて可能発電電力量約3億5400KW時の4発電所を建設計画あり。之が完成の上は九州は勿論、本土並に賄ひ得られ、独立日本再建の基礎が確立せられるべく之が成否は一に山林の整備にかゝり之が元締たる管林局の任務と責任の重大なるを痛感する。加ふるに大分、宮崎、鹿児島にかけて林産、鉱産資源は本県水力電気の高度化により近代化学工場の誘致を一段と有望せられる秋、管林局の宮崎移転こそ本学の既設に国立林業試験場の出先機関たる分場の設立、九州唯一の県管椎茸種駒製工場の設立を露拂として用検討を要することを力説して止まない次第であります。

## 竹林の施肥試験 (予報)

九大農学部 青木 尊重

I 竹林の生産力増強に當つては雑草木の除去、不良竹の整理は勿論土入、牧草等と共に施肥効果が云々されている。而して特に施肥に関する試験を開始した目的は、

- 1) 施肥による林分への影響即ち ① 発芽量の増加、② 大径材生産への期待 ③ 生産竹材の外的、内的変化及び ④ 林分の環境への順応抵抗力等が如何に変化するか、
- 2) 施肥の季節、回数、種類、量及び方法を如何に計画、運営すべきか、等の事項を認識することにより、経営生産組織確立の際の基礎事項たらしめようとする為である。

本試験に対し終始御指導を仰いだ九大井上、大野両教授、多大の御高配を賜つた熊本管林局小幡元経営部長、片山経営部長、森田計画課長始め関係者各位加えて本試験に協力された荒武、長沢両氏に深く謝意を表する。

II 試験地の概況